

湖都通信

06

滋賀医科大学同窓会「湖医会」



Coto Tsushin
[Nursing subject Version]

看護学科版

2020.3.1



CONTENT

会員からのたより	中野小夜・藤吉奈央子・山中峻吾 中井抄子・吉田彬人・竹中愛海	2
看護学科交流懇談会	河原めぐみ・伊藤加奈・能 あんず	8
海外からのメッセージ	川本真弓	10
同期会10年会	吉永友加里・三浦歩美・宮松直美	11
20年会	奥野圭子・金子節志・河田志帆 和田恵美子・滝澤寛子	13
総会・支部会（滋賀支部）		16
事務局から	総会議事録 ほか	20

これまで、これからも



新旭養護学校 養護教諭
中野 小夜(看6期)

大学を卒業後、すぐに県内の特別支援学校の養護教諭として働き始め、もうすぐ17年が経とうとしています。「所属先は1番学校数の多い小学校かなあ」と漠然と考えていた中でまさかの特別支援学校勤務でした。知的障害や自閉症、肢体不自由にさまざまな基礎疾患がある子、医療的ケアを必要とする子、言葉でのやりとりが難しい子……。知らないことだらけの現場で養護教諭として期待され、責任を担うということに不安でいっぱいになり、涙を流したこともありました。それでも、今日まで勤務してこられたのは、職場の先輩や同僚、管理職の先生、養護教諭仲間、家族等、たくさんの人に支えられ導いてもらえたからだと思っています。そして、何よりも1番の元気の素は子ども達のキラキラした笑顔や「頑張ったぞ!」と感じた時のどや顔、素直でのびのびとした感性に触れる時、特別支援学校の養護教諭で良かったな、と実感しています。

また、子ども達の思いや願いに寄り添いながら、成長を見守る中で自分自身の人生感や価値観も大きく変わったように思います。このような変化はもしかしたら他職種では感じ得なかったものかもしれま

せん。さらに、仕事から学んだことは自身の子育てにも大いに役立っています。我が子という存在のとりえ方、声のかけ方、日常生活での気配り、待つことの大切さ……。日々、仕事の中で培ってきたものが子育ての参考となり、助けとなっています。私の人生にとって、特別支援学校との出会いは必要なことだった、と感じています。

こんな風に、近頃ではこれまでの自分の仕事ぶりや家庭の様子を振り返り、これからをどうしていこうかなあ、と考えている自分がいます。特別支援学校の養護教諭を極めていくのもいい、他職種を経験してみるのもいい、おもいきって仕事を変えることもできるし、これまで仕事の隙間にやっていた家事を丁寧に行ってみることも楽しいかもしれない。

人生100年時代と言われるようになった今、いつまで思うように身体が動き、しっかりとした意思を持って生きられるか分からないけれど、仕事や育児や家事を通して、自分らしさがますます分かってきたからこそ、大学生の頃を思い出し、一歩踏み出すことを恐れない自分でいたいな、と思う今日この頃です。

産業看護の可能性を信じて



藤吉奈央子(看6期)
(旧姓：木曾)

大阪赤十字病院・精神科で2年間の看護師経験を経て、看護学科3年次に編入しました。

学生時代、医学部社会医学講座公衆衛生学部門のリサーチナースとしてアルバイトをし、そのご縁で、卒業後は半導体メーカーで産業保健師としてのキャリアを踏み出しました。半導体工場での勤務は3年間でしたが、自分の立ち位置、保健師としてのバランス感覚など、企業の医療職として働く原点を教わりました。その後、金融機関から健康管理室を立ち上げる話を頂戴し、転職。9年間邁進しました。この間、二人の子供を授かりました。育児休暇も取得せず仕事をしてきたワーカーホリック気味な私ですが、ある葛藤がずっとありました。それは、“私が提供しているサービスは健康意識の高い組織の従業員だけが受けられるものでは？”という思いです。

そこで、“もっと自分の…産業保健の可能性を試したい”という思いから、2016年にフリーランスの保健師として活動するため独立しました。

現在、契約先は大阪の複数の企業、労働衛生機関など。大手企業では遭遇しないような課題や驚き、出会いが多々あり刺激に満ちた毎日です。企業以外にも国際がんセンターをはじめ、大阪のがん拠点病院3か所で『がんと治療の両立支援』の相談に対応しています。相談に来る人の多くは、中小零細企業の従業員。支援内容はまずは社長の理解を得るためにすること、そして経済的な面も含めて生きていくための知恵の伝授など。残念ながら支援中に亡くなられる方や退職勧告される方もいます。それでも企業と働く人の双方が納得に近付ける事、支援者

がいると感じてもらふ事は非常に重要です。“アドバイスをもとに会社と交渉してしっかり働けています！”という嬉しい報告もあり、時には仕事という枠を超えた出会いに喜びを感じています。

独立したもうひとつのきっかけが、学生時代のご縁で所属していた社会医学講座での課程を終えるという動機です。三浦教授をはじめ、多くの先生方の指導を受け“社会的要因とコレステロール”について論文にさせて頂き2018年に博士課程を修了しました。

学術・現場、双方向から実感として得た健康格差は今後も私の仕事の中心テーマだと思っています。社会に育ててもらった御恩を、どのように還元出来るか…微力ではあるものの、産業保健を展開し、一人でも多くの働く人の健康意識・生活レベルをアップするための支援を行いたいと模索しながらの毎日です。



両立支援を行っている場面です

チーム医療の一員として



滋賀医科大学医学部付属病院 ICU 看護師

山中 峻吾 (看11期)



私は2008年3月に滋賀医大を卒業後、滋賀医大附属病院に看護師として就職し、現在に至ります。早いもので気づけば勤続10年を超えました。現在は故郷である滋賀県米原市から通勤しております。琵琶湖線で通学した学生時代初期に思いを馳せながら、毎日通勤電車に乗っています。

私が新人看護師として配属されたのは、心臓血管外科・循環器内科の病棟でした。循環器病棟ということで重症患者さんや急変リスクの高い患者さんが多く、ナースステーションでは絶えず心電図モニターのアラームが鳴り響いているような忙しい病棟でした。もともと循環器は希望の一つだったのですが、入職当初は大変なところに来てしまったと思ったものです。はじめは仕事を覚えることで精一杯だったのですが、徐々に業務もこなせるようになり、患者さんとの関わりの中で看護師としてのやりがいも感じるできるようになりました。看護師5-6年目となり、これからどうしようかと考えていた頃、部署で心不全患者さんに対する多職種チーム：ハートケアサポートチームの立ち上げの話が持ち上がりました。当時私は学会や研修に積極的に参加し、循環器看護について深める努力をしているつもりでした。しかし実際の患者さんによりよい医療・看護を提供するには個人の力では限界がある

と感じることもあり、チームの立ち上げに参加することとしました。チームは医師、看護師、理学療法士、薬剤師、管理栄養士などなど非常に多くの職種で構成されています。チーム発足から年月を重ねる中で、様々な職種が顔の見える関係となりました。職種の垣根を越えて気軽に相談し協働できるのがこのチームの強みです。個人がいくら知識や能力を深めても成し遂げられないことを可能にする、そう思わせるチームです。現在は多職種カンファレンス、集団教育としての心臓病教室、スタッフ教育としての勉強会（通称ハートミーティング）など多岐にわたる取り組みを実施しています。現在ICUで勤務する私は、心不全を持つ患者さんと超急性期の段階で関わっています。ICUではモニターや身体所見に目がいきがちですが、チーム活動の中で得た全人的な視点を部署の中で発信し、病棟・地域といった次の段階につないでいくことが役割だと考えています。とはいえ、ハートケアサポートチームのメンバーとしてICUでもっとやれることはないのか、やるべき事はないのかと日々模索しています。滋賀医大を卒業してから干支が一回りし、最近では指導的立場を担う機会も多くなりました。チーム医療の大切さや可能性をなんとか伝えたいと考えながら、今日も琵琶湖線に乗って通勤しています。



教員の立場から学生時代を振り返る



中井 抄子

(旧姓 和多田)
(看12期・助産師課程3期)

滋賀医科大学を卒業して10年が経過しました。最初の6年は臨床で助産師として働き、現在は滋賀医科大学の教員5年目に突入中です。入学当時、本当は管理栄養士になりたかった私は同級生の看護師を志した理由を聞き、なんとなくの理由しか言えない自分には看護を学ぶ資格はないと思い、帰宅と同時に両親に浪人させて欲しいと頼みました。しかしそれは叶わず、毎朝ボートを漕ぎ部活に没頭しているうちに、あっという間に4年が過ぎ、助産師・看護師としての人生が始まりました。

学生時代の私は、部活やバイトで講義を疎かにし、テストではヴァージニア・ヘンダーソンの14のニードが書けずに基礎の先生に毎回一番前の席に座らされ、講義中に部活の疲れからウトウトして先生に指導され、地域の実習前には足の骨を折るという…振り返ってみると、本当に先生方の頭を悩ませる学生だったろうと思います。そんな私が今は、講義中に眠りがちな学生を起こし、より実践に結びつく教育って何だろうと思いを巡らせながら講義や演習を考え、実習の際は、社会に出て困らないようになるべく自立して動ける看護師のたまごを育てようと必死になってもがく日々を送っています。社会人ではない、学生に教えるということは難しく、特に感性を育むことは本当に難しいです。自分の時はどうしていたのかと振り返ると、学生時代にお世話になった患者さんや指導者さん、先生の顔が思い出されます。

臨床に出てから、もっと学生時代に真面目に勉強しておけば良かったと痛感する場面が多々ありました。

その反動もあってか、現在は母校の修士課程を経て博士課程に入学し、ウィメンズヘルス看護学を勉強しています。予想していなかった現状に、こんなはずじゃなかった・・・と思う一方、充実した日々を送ることができており、看護を学ぶ道を選んで本当に良かったと感じる今日この頃です。お世話になった患者さんや先生方、同級生や先輩後輩、両親に感謝です。

もうすぐ教員として社会に飛び立つ学生を見送る5回目の春がやってきます。湖医会通信を読んでいる卒業生の先輩方、しばらく手がかかるかと思いますが、かわいい新人・後輩たちをどうぞよろしくお願いいたします。



大学病院から在宅へ



滋賀医科大学附属病院ICU 看護師

吉田 彬人(看20期)

私が大学を卒業してから、3年の月日が流れようとしています。

2017年の春、大学を卒業後に私は、滋賀医科大学附属病院のICUへ配属されました。緊張感に押しつぶされそうな日々の中、急性期のスピード感に置いて行かれそうになることもありましたが、同期や先輩方に支えられながらなんとか食らいつき、リーダーが出来るまでになりました。そして2年目の冬が終ろうかというとき、訪問看護ステーションへの出向の話が舞い込んできたのでした。この出向は、病院における看護師の在宅療養を支援する機能の強化や、入退院システムの推進を図る人材を育成する、などを目的に始まったプログラムの一環とのことでした。在学中、在宅看護に興味を持っていた私は、当時新設された「新卒訪問看護師育成プログラム」の第1期生として、既存の在宅看護学の実習に加え、6週間の実地実習や在宅看護に関する学を修めました。卒業し、ICUで働くようになってからも、いつかは地域医療に携わる仕事に従事したいと考えていた私に舞い込んだこの話は、実に魅力的で絶好の機会だったのでした。

実際に出向して訪問看護師として働いてみると、様々なことを感じ、そして考えます。どうやって生活しているのか想像できないような環境で生活している方、独特の価値観と信念をもって生きている方、ICUにいた僕には信じられないような状態でもしっかり在宅療養している方もいます。そして、そこにはその方たちを支える訪問看護師をはじめとした多職種による包括的なシステムがあります。どれも病

院では、特にICUでは決して見ることはできなかった世界です。この世界を垣間見られただけでも、看護師としての幅が広がったように思えました。また、学生時代の実習では、看護計画を立てる際によく「患者さんの家ででの生活を想像して」や「生活背景を捉えて」などといった言葉を耳にしましたが、それは時間をかけて情報収集してもなかなか見えてこないことがほとんどでした。しかし、実際に在宅で自宅療養している方の家に行くと、すぐにその人の生活背景が見えてきます。

在宅療養を実際にこの目で見てみると、今度病院に戻った時には、患者さんの全体像をもっと幅広く捉えることが出来るかもしれないと思いました。また、大学病院と地域医療をつなぐ存在もこれからはさらに求められると感じています。出向は3月で終わりますが、再度病院に戻った時には、在宅で培った視点を活かした看護を展開していけるようこれからも精進していきたいと思っています。



社会人となって



竹中 愛海(看22期)

看護学科22期生の竹中愛海と申します。私は今、とある病院の、脳神経内科と口腔外科の混合病棟で働いています。入職して7カ月経過しましたが、まだまだ至らないことばかりで、毎日新しい学びを得ております。しかし、患者さんからは一人の看護師として扱われ、高度な要求を受けることもありますし、自分の観察・技術不足が、患者さんの病態や治療に直結することから、専門職としての責任の重さを痛感しております。まずはこの半年間を振り返り、現在の心境を述べさせていただきたいと思います。

私はこちらの部署を自ら志願し配属されました。その理由は学生時代に学んだ基礎看護技術を活かし、生活援助を実践できる環境だと考えたからでした。実際、こちらの部署には、幅広い年代の、様々な病状の患者さんがおられるため、いつも多種多様な看護を実践することができております。多重課題に悩むこともあります。一人一人のニーズに合わせた、質の高い看護の提供を目指し、日々試行錯誤しております。

私が学生時代に繰り返し指導された視点の一つに、患者さんの『個別性』と『安全・安楽・自立』を守る視点があります。当時は、標準看護手順を意識す

るあまり、自分が立てた計画通りに実施する事ばかり考え、結果として、病態の理解や思いの聴取、自律の視点が不足することがありました。これを受け、現在は、先輩方から助言を受けながら、自分なりに、患者さん自身の能力や、病態、その場での反応を意識し、より良い方法を追究するようになりました。先日の研修では、医療分野におけるサービスは、提供される時点での品質確保が難しいため、医療従事者は常時その事を意識し、PDCAサイクルやマニュアルを使用した品質管理を行う必要があると学びました。

ここまで仕事に対する思いを述べてきましたが、休日は、友人や先輩とカフェに行ったり、スポーツジムで汗を流したりしています。学生時代も感じていたことですが、社会人になると一層、人間関係の大切さを感じるようになりました。継続看護において多職種連携は不可欠ですし、一人で解決できない問題を誰かに相談することは、打開策を見出し、前向きに捉える意欲の向上に繋がると実感しております。これからも、人のご縁を大切に、理想の看護について思案していきたいと思います。最後までお読みいただきありがとうございました。





看護学科交流懇談会に参加して



河原めぐみ

(看7期：修士課程 2年)

昨年引き続き、今年もお声がけいただきありがとうございました。今回は卒業後1年目や3年目の卒業生の方々がいらっしゃったので、学部4回生時の過ごし方や就職直後の様子はお任せし、私は看護師として、病院や訪問看護ステーションでの勤務などを通して、どのようなキャリアを積んできたか、またそのきっかけなどを中心にお話しさせていただきました。在校生の方々にとっては、就職試験や国家試験対策が専ら興味のある内容ではあったかと思いますが、同時に、自身が将来どのような看護職として歩んでいきたいかという目標を持つ大切さを認識していただければ幸いです。未

来にむけて頑張る皆さんと交流し、私自身も多くの刺激をいただきました。共に看護専門職として活動できる日を楽しみにしています。最後に、この会のためにご尽力いただきました関係者の方々に、御礼申し上げます。

来にむけて頑張る皆さんと交流し、私自身も多くの刺激をいただきました。共に看護専門職として活動できる日を楽しみにしています。最後に、この会のためにご尽力いただきました関係者の方々に、御礼申し上げます。



看護学科交流懇談会を振り返って



京都第二赤十字病院 看護師

伊藤 加奈

(看22期)

私が滋賀医科大学を卒業して約1ヶ月。新しい環境で、日々初めての業務に向き合いながらあっという間に過ぎた1ヶ月でした。就職して間もない私に、学生にとって有益なお話ができるか不安

今振り返ると、4回生は実習も経験し、国家試験や卒業研究も進めていく中で、自分がやりたいことに1番取り組めた1年間だったように思います。進路や就職活動など、将来に対する不安に直面することもあるかもしれませんが、この1年を悔いなく終わられるよう、1日1日を大切に過ごして頂ければと思います。

も持ちつつ参加させて頂きましたが、発表や懇談会の中で、4回生の実習時のことや国家試験、就職活動等様々な質問を頂き、私自身がこれまでの学生生活や就職してからのことを振り返る良い機会を頂いたように感じています。





看護学科交流懇談会担当
能 あんず
(看護学科4年)

交流懇談会での学び

今回、交流懇談会を通じて新卒看護師の方から3年目の看護師の方、様々な形で看護職として活躍されている先生方のお話を聞くことができました。今まで活躍されてきた経験談や国家試験の勉強方法などを詳しく聞かせていただいたので、卒業後や就職するまでの1年間のイメージを膨らませることができました。

特に国家試験の勉強方法や面接内容は、私たちに
とって直近の情報であり、この一年をどう過ごすべ

きか考えさせられました。4年生は就職活動や国家試験について考え出す時期でもあるので、悩みや不安が多いですが、そんな私たちの投げかける質問に詳しく丁寧に答えてくださって、多くの方が悩みや不安を解消できたと思います。就職するまでに計画的に過ごせるよう、今回の交流懇談会で学んだことを実際に活かす努力をしていこうと感じました。

お忙しい中、私たちのためにお越し下さった先輩方をはじめ、交流懇談会を開催するにあたってご協力くださった先生方や「湖医会」の皆様にご心より感謝申し上げます。



ベルギーでの暮らし



川本 真弓(看16期)
(旧姓：中村)

私は大学卒業後、病院で看護師として3年半、健診センターの保健師として2年間勤務しました。現在は、夫の海外赴任に帯同するため仕事を離れベルギーに住んでいます。

ベルギーは西ヨーロッパの中心に位置し、九州ほどの面積の小さな国です。フ

ランス、ドイツ、オランダ、ルクセンブルクに隣接し、車で2・3時間で行き来できる立地の良い場所にあります。私が住む首都ブリュッセルにはEUやNATOの本部があり国際都市と言われています。ベルギーと聞いて多くの方がチョコレートやワッフルをイメージされるかと思いますが、GODIVAやピエールマルコリーニ等日本でも有名なチョコレートの本場で、街のどこにでも見かけることができます。

また日系企業も多く、日本人がたくさん住んでいます。日本人が多く住む地域のマルシェ（市場）では日本語表記でお肉が売っていたり、店員さんが日本語で対応してくれることもあります。

ただベルギーの公用語はとても複雑で、ベルギー北部はオランダ語、南部はフランス語、ドイツ国境近くはドイツ語です。英語が通じないこともあり、当初とても驚きました。ブリュッセルでは8割の方

がフランス語を話します。ブリュッセルを離れ、隣町へ行くと急に目にする言語が変わり、他国に来たような感覚にもなります。

このように多言語国家であることから、国が言語学習を支援しています。語学学校は豊富にあり、授業料も安いです。私の通っている語学学校のクラスメイトは南米、アフリカ、ヨーロッパと様々な国の方がおられ、ベルギー以外の文化にも触れることができます。

次に医療事情ですが、多くの日本人駐在員は日本語が話せる医師をホームドクターにしています。専門的に診てもらう際は、紹介で専門医を受診します。また他の医療機関を受診しても治療経過など患者の情報はホームドクターに送られ、情報を一括管理しています。ベルギーは分業制が進んでいます。ホームドクターは科を問わず様々なことに対応しており、日本より担う役割が多い印象です。そして、こちらに来て驚いたのは、医師のストライキがあること。(救急病院は受診可) 日本では考えられないですね。

まだ半年しか経っていませんが、多くの人種が暮らすベルギーでは、多様な価値観や習慣がありながらも上手く調和されながら人々が暮らせているように思います。おおらかなベルギー人の性格もあるのでしょうか。私も多様な文化に触れ、自身の視野を広げていきたいと思っています。



ブリュッセルにある世界遺産グランプラスです。世界で最も美しい広場と言われています。



ブリュッセルにあるEU本部です。

卒後10年同期会に参加して



吉永友加里(看11期)

この度は、滋賀医科大学看護学科第11期生 卒後10年同期会を開催していただき、ありがとうございました。携帯電話やSNSが普及し連絡を取りやすい環境ではありますが、なかなか実際に顔を合わせる機会が作れずにいた中で、このような場を設けていただいたことは、湖医会はじめ幹事のお二人には感謝の気持ちでいっぱいです。また、お忙しい中、恩師である宮松直美先生にまで来ていただいたことは、本当に嬉しく思います。

卒後10年も経っていたなんて、月日の早さを感じずにはいられませんが、みんなの雰囲気は10年前と何も変わっておらず、卒後以来はじめて会う友人もいましたが、久しぶりだとは思えないほど会話は盛り上がり、本当に楽しくて、あっという間に時間が過ぎてしまいました。仕事の話、プライベートな話、話は尽きることなく、笑い続けていました。恩師の宮松先生にも、私たちの他愛も無い話で同じように盛り上がっていただき、フランクな形で一緒に楽しんでいただけた事がとても嬉しかったです。本当に素晴らしい仲間・素晴らしい先生に出会えて

いたんだなと改めて実感し、滋賀医科大学に入学できて本当によかったなと思いました。仕事や育児等の都合で合えなかった友人もいたのは残念でしたが、たくさん笑って、たくさんパワーをもらって、また明日から頑張ろうと思える素晴らしい同期会でした。本当にありがとうございました。



卒業10年同期会に参加して

去る平成31年2月15日、私たち11期生の卒業10年の同期会が開催されましたので報告いたします。

案内をいただいた時からぜひ出席したいと思い返事したものの、当日誰が出席するのかほとんどわからないままで、どこか少し緊張するような、期待するような気持ちで参戦いたしました。

会場は学生時代からある居酒屋でしたので、記憶をたどりつつナビで検索すると、当時と全く異なる場所が表示されました。心配になり、出席することを知っていた吉永さんに連絡すると「店の場所移転してんで！」と教えてくれ、当時と変わらない吉永さんの口調に安堵しながらも、10年の歳月を再認識したのでした。

少し遅れて会場に到着すると、当時と変わらない空気感での同期会が盛況されており、「久しぶり!!」を合言葉に思い出話に花が咲きました。職場や環境が違えど、学生時代をともに過ごした同級生とはやはり気心が知れており、10年のブランクなんて全く感じられない程でした。近況には様々な変化がありました。みんな内面は学生の頃のまま嬉しく感じました。お忙しい中ご出席いただいた宮松先生は外見とも当時のまま一切変わらず、私たちの話に共感してくださり、また助言してくださり、最後の

挨拶では「皆さんがいたころの教員は少なくなったけれど、大学はいつでもあなたたちを歓迎します」と本当に温かいお言葉をかけていただきました。

私は現在附属病院にて病棟勤務をしております。

入職時には20人以上いた学部卒業生同期も徐々に減っていますが、それぞれが異なるフィールドで新たに活躍していることに刺激を受けました。また10年の内に看護師・保健師・助産師としての専門性を深めていたり、あるいは全く異なる領域で活躍していたりと、大変興味深く話題に尽きない時間を過ごすことができました。

今回の会に出席できなかった友人たちからのコメントも湖医会のご厚意にてとりまとめいただき、近況を知ることができました。ぜひ期間を開けずに次の会が開催できることを希望いたします。お忙しい中、幹事役を務めてくれた二人に感謝いたします。また、会の開催にあたりまして、ご協力いただきました湖医会に感謝いたします。



三浦 歩美(看11期)
(旧姓 梅本)



滋賀医科大学臨床看護学講座(成人看護学) 教授 宮松 直美

卒業10周年同期会に出席して

昨年2月15日看護学科11期生の卒業10周年同期会に出席させていただきました。

一昨年の暮れに幹事からご案内をいただき、卒業アルバムを見ながら「この学年が卒業してからもう10年になるのか」と月日の流れの速さを感じるとともに、皆さんの成長ぶりを目にする事ができることをとても楽しみにしておりました。当日は十数名の卒業生が17時という(なんと中途半端な!)開始時間に集まり、昔話や近況報告などの楽しい時間を過ごしているところに私も加えていただきました。ひととき学生時代に帰ったかのようにお話ししている卒業生の皆さんの姿を拝見し、私自身も10年若返ったような気分でした。

また、当日出席が叶わなかった卒業生や当時の教員からのメッセージも配られ、お一人お一人の学生時代を思い出しながら読ませていただきました。

卒業数年も経つと、第一線で看護職として活躍中、子育てに奮闘中、あるいはその両方を抱えて日々頑張って舞っているなど生活は多様であり、それぞれに楽しみや喜び、つらさや悩みは異なると思います。皆さんの中には、これからどのように進んでいこうかと迷っているかたもいることでしょう。そんなときにはぜひ母校の教員に連絡をいただき、一緒に考える機会を持っていただけたらと思います。

最後になりましたが、幹事の中込さん、北川さん、お声掛け下さってありがとうございました。また、こうした機会を卒業生に提供して下さっている湖医会の温かいご支援に感謝申し上げます。

卒後20年同期会に参加して

奥野 圭子(看2期)

去る令和元年11月9日、琵琶湖ホテルで開催された看護学科卒後20年同期会に参加させていただきました。お天気にも恵まれ、美しい琵琶湖の見える会場で、懐かしい先生方、同期生と集うことができました。

私は3年次編入組で学生生活はわずか2年だったため、自分のことを覚えてくれている人がどれだけいるのか、会の中で浮いてしまわないか、と不安を抱きながらの参加でした。ところが、受付で早速幹事さんから当時のニックネームで声をかけていただき、ほっとしました。会場に入ると、顔はわかるのに名前が出てこない…という脳の衰えは痛感せざるを得ませんでした。話せばすぐにタイムスリップし、学生時代に戻っておしゃべりに花が咲きました。

先生方も含めた参加者一人ずつの近況報告では、

プライベートはもちろんのこと、病院や医院の看護師・助産師、行政や企業の保健師、介護分野、教育機関等々、それぞれの場所でさまざまに活躍している様子がかがえしました。卒後10年の同期会と比べると、良い意味でどこか肩の力が抜けており、皆自分のスタイルを確立しているように感じました。そして、自分自身も今いる場所、自分のペースで地道にやっついこうと思えました。

再会を誓って散会しましたが、LINEグループも作成され、会の写真を共有したり参加できなかった人ともつながることができました。

最後に、遠方にも関わらず色々とお世話くださった幹事さん、私たち看護学科2期生のためにお忙しい中駆けつけてくださった先生方、湖医会事務局のみなさま、本当にありがとうございました。

琵琶湖はやっぱりきれいでした

大きな窓から琵琶湖の景色が広がるほんとに気持ちいい会場でした。遠くに船が浮かぶ上品な景色を学生時代にも見ていたはずですが、特に今回は「いいなあ・・・」と素直に感じていました。歳をとったからなのか、それとも琵琶湖から離れて暮らしているから懐かしいのか、とにかく琵琶湖がキレイでまた滋賀に住みたくなりました。幹事の皆さん、素敵な会場を準備してくださり、ありがとうございました。

卒業時には卒後20年後の自分など想像もしていませんでしたが、恐ろしいことに20年などあつという間に過ぎてしまうものなんですね。卒後10年の同窓会に出席していなかった私は、15年ぶりに緊張しながら会場に行ったのですが、「なんや、みんな全然変わってないやん…。周りからどう見たかはわかりませんが、おじさんの目にはみんな学

生の頃のままでしたよ。…あ、すいません、ちょっと言い過ぎました。

みんな働き盛りで仕事でも子育てでも、それぞれ第一線で活躍していてすごいなあとと思うものの、予想以上に頼もしすぎて学生の頃のイメージとのギャップが面白かったです。勉強になるなあと感心しながら聞いていたら、そのうち「老眼鏡はこのメーカーがいい」だの「四十肩は急にくる」だの、貫禄のある内容になってきて、面白いやら勉強になるのやら大いに盛り上がりました。あつという間に時間が過ぎてしまい、まだまだ話したりず、きれいになった大津の駅前でもた飲んでしまうのでした。今度はみんな、関東で集合ですよ。



金子 節志(看2期)

卒後20年同期会に参加して

2019年11月9日に琵琶湖ホテルで開催されました看護学科2期生卒後20年同期会に参加させていただきました。

私は、卒後滋賀県に居を構えつつも今回が初めての参加でした。この日はとても天気良く、遠くまで見える琵琶湖がこの会の開催を祝福してくれているように感じました。そして、会の進行とともに「変わってないやん!!」「どうしてたん?」と、聞き覚えのある声が聞こえ始め、一気に時間が戻るような感覚を味わいました。

そして、同期生の近況報告では、皆が活き活きと話す姿から各々の道を力強く進んでいる様子が伝



四天王寺大学看護学部看護学科 教授
和田恵美子(元教員)

この度はお招きくださり、ありがとうございました。30歳の自分を思い出しながら50歳目の今、気持ちを新たに伺いました。皆さん昔の面影はかわっておられず、「えーっと、あなたは…」と名札を見比べながらの挨拶は、うれしく恥ずかしくもある瞬間でした。私たち(元?)教員は皆さんの目にどのように映ったのでしょうか。20年も経っているはずなのに、すぐに縮まる距離。同じ時を過ごした同士のつながりは、こんなにも強いものだと思えます。

「和田先生との実習、こんなんやった!」「先生にこんなこと聞かれた」と言われると穴にも入りたい気持ちになりますが、それは返せば、皆さんが日々かけられている患者さん、妊産婦さん、地域住民の方、学生さんへのことばがひとつひとつ積み重なっていることの表れであると考え、当時の不十分さについてはご容赦いただきたく思います。

「何も特別でない中小規模病院のナースです。」



わってきました。同期生の多くが働き続けていることに驚きつつも、看護職の素晴らしさを改めて実感しました。

現在、私は京都市内の大 **河田 志帆**(看2期) 学で保健師課程の教員として (旧姓 小出)

て、後進の育成に携わっております。これまでも、同期生には実習や様々な会議でお世話になってきました。常日頃、苦楽を共にした仲間への存在は頼もしく感じております。また、学生の時にお世話になった先生方と一緒に仕事をさせていただく機会があり、己の未熟さを痛感しつつ日々看護職を育てる難しさを感じております。

今回の同期会の参加では、同期生の皆さんから大いなる刺激とパワーをいただきました。次の回にも参加できるように、自らの健康も大切に、頑張っていきたいと思っております。

最後に、同期会を企画していただきました幹事の皆様、本当にありがとうございました。

20年同期会に参加して

「急性期では見えなかった患者さんが、日常へ帰っていく回復リハビリの支援をしています。」

「新人さんを(病院へ)送ってください。いちから教育させていただきます。」

「母子保健、高齢者福祉事業に日々翻弄されています。」

「助産師です。少子化で様々なニーズがある中、個別のサービスを提供したいのに他の業務に追われています。」

皆さんからいただくことばは、現代医療の現実そのまま、まるで公衆衛生統計や医療者教育の総合授業でも受けているようでした。

20年ってすごいなー、と多岐にわたる皆さんご活躍の場を実感し、「次世代の人材を輩出する」大学本来の使命、またその結果や実績は性急に求める必要がないことを認識できました。

女性は様々なライフコースをたどります(女性限定御免、金子さん、ジェンダーフリー賛成派であることを祈ります)。決して人と比較することなく、フレキシブルさを大いなる自信、強み、誇りとして自分に認め、生きつつ、また10年後(?)お目にかかれれば大変うれしく思います。

20周年同期会に参加して



京都先端科学大学 健康医療学部
看護学科 准教授

滝澤 寛子 (元教員)

看護学科2期生の皆様、卒後20年、おめでとうございます。また、同期会に招待していただき、ありがとうございました。

皆さんは、私が大学教員として年間を通して実習指導を担当した最初の卒業生であり、私にとって特別な思いがあります。10年前の同期会での再会では、皆さんの学生時代の実習での出来事を思い起こしながら、10年の間にすっかり立派になって活躍している姿に感動したことを覚えています。それから10年という月日を経て、さらに自分自身の人生を充実させながら看護職としてのキャリアを積み、現場スタッフの育成や学生指導、組織管理など、看

護を追求し続けている皆さんの姿に感激しました。経験から何を学び、どう意味づけるのか、しっかりとした自分軸と俯瞰する視点を持ち合わせ、この先にどう結び付けるか考える力をもっているのを感じました。そんな皆さんの姿に刺激を受け、わが身を振り返る貴重な時間となりました。

次の10年後、皆さんがさらにどのような進化をされているのか楽しみにしながら、皆さんに恥じぬ自分でいられるよう私も頑張りたいと思います。

今回の同期会開催にあたり、諸事万端にわたりお世話くださいました幹事の皆様と湖医会事務局の方々に、心より感謝申しあげます。

2019年度総会・

第5回滋賀支部会が開催される

2019年8月25日（日）、ホテルボストンプラザ草津において2019年度総会と第5回滋賀支部会が合同で開催されました。

総会は、永田 啓会長のあいさつのあと、議事に移り、2018年度事業報告・決算及び2019年度事業計画・予算について審議され、それぞれ承認されました。

滋賀支部会は、前川 聡支部代表（医1期）のあいさつのあと、新たに就任された県内の病院長4名と大学の教授2名の紹介があり、それぞれの先生からあいさつをいただきました。

懇親会は、木築野百合先生（医5期）の発声による乾杯で始まりました。参加の皆さんからは近況など興味深い報告もあって大いに盛り上がりました。



横田 豊郷病院長

西村 マキノ病院長



仲 日野記念病院長

五月女 ヴォーリス記念病院長

尾関 教授

芦原 教授



新入生研修

同窓生と懇談

4月5日、新入生研修の一環として同窓生との懇談会が開催され、小寺加那子さん（看20期）のお話により新入生は真剣な面持ちで聞き入っていました。



2019年度「湖医会」総会 議事録

- 日時／2019年8月25日(日)17:00～18:00
- 場所／ホテルポストプラザ草津 ケネディルーム

議 題

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1. 2018年度事業報告及び決算見込について | 原案（資料1-1、1-2）のとおり承認された。 |
| 2. 2019年度事業計画及び予算について | 原案（資料2-1、2-2）のとおり承認された。 |
| 3. 会則の一部改正について | 原案（資料3）のとおり承認された。 |

※ 各資料は {湖医会} HPを参照

湖医会ポータルサイト バージョンアップ!!

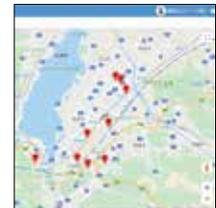
地図機能で湖医会会員を検索できる!!

登録がまだの方は是非登録をお願いします!!

勤務先住所などプロフィール入力にて、
皆さんのことが会員から検索できるようになります。

配布のID、パスワードがご不明な方は、
ご連絡ください。

問い合わせ／e-mail : koikai@koikai.org



会員の現況 (1/1現在) 総数 6,578名

- | | | | |
|--------|---|--------|------------|
| ● 卒業会員 | { (学 部) 5,315名 (医 学 科 3,822名
看護学科 1,493名)
(大学院) 15名 | ● 学友会員 | ————— 106名 |
| ● 在学会員 | 1,084名 (学部: 964名、
博士: 91名、修士: 29名) | ● 特別会員 | ————— 58名 |

会費納入のお願い

看護学科は終身会費制 **終身会費 20,000円!**

これまでに20,000円以上を納入されている方は、終身会員となっています。

20,000円に満たない方はその差額を納入された時点で終身会員となります。

終身会員でないと、広報誌や卒後10年・20年の同期会の案内などがお届けできないことになります。

詳しくは、湖医会事務局までお問い合わせください。

名前・住所・勤務先・メールアドレス等が変更になった場合は、
メールまたはファックスで事務局までご連絡ください。

